

# ワークショップ「一九八〇年代の雑誌にみる反原発思想」 報告と今後の課題

## 一、趣意説明

本ワークショップ「一九八〇年代の雑誌にみる反原発思想」は、二〇二一年二月二五日に開催された第六五回原爆文学研究会にて行われた。本稿は、ワークショップの趣旨や当日の内容を記録し、今後の課題を記述するものである。まずは、第六五回研究会の案内に記載した本企画の趣旨文を引用する。

一九八〇年代の雑誌における反原発思想の展開の重要性は、桂秀実『反原発の思想史』（筑摩書房、二〇二二年二月）などでも主張されているところである。しかし、八〇年代の反原発思想は、サブカルチャーやスピリチュアリティ、エコロジー運動などと関係しながら展開した側面があるため、ある予断と偏見のなかに閉塞されてきたようにも思われる。大野光明ほか

加島 正浩

編『メディアがひらく運動史』（新曜社、二〇二一年七月）が示すように、社会運動における情報メディアは、表現を可能にする単なる「道具」ではなく、様々な関係性を生み出す運動体としても機能する。メディアに現れた思想のある側面のみを取り出し、評価をくだすだけでは、八〇年代において大規模に展開された反原発思想のダイナミズムを捉え損なうことになる。

本ワークショップでは、反原発思想が他ジャンルの文化や思想と結合し、新たな関係を生み出そうとした「場」として八〇年代の雑誌を捉えたい。これまで踏み込んだ分析がなされてこなかった児童文学領域や、JICC出版局や野草社の雑誌を扱うことで、八〇年代に反原発思想がどのような関係を生み出しながら展開していたのかを考察する。それにより、「古い運動」を一枚岩的に捉える硬直した見方を越え、過去の運動

から学ぶ回路を切り開いた道場親信(『占領と平和』(青土社、二〇〇五年一月↓新装版、二〇二二年七月)に倣い、現在の運動にも寄与できる視点の提示を試みたい。

企画者の意図を加えて、説明したい。趣旨文でも述べている通り、一九八〇年代の反原発運動と、ニューエイジ思想やエコロジ運動が深く関係していることを網羅的に指摘した桂秀実の仕事<sup>①</sup>は重要ではある。しかし、『当時は(引用者注—吉本隆明『「反核」異論』一九八二年二月の刊行時)もう反核派の中には反原発派もいたわけですが、そこには当時はまだよく言葉にはできないような漠然とした、ある種の気持ち悪さもあつたんですよ。反原発を言っている人たちの中にエコロジイという……。』(中略)後からの言葉ではつきり言えば、ニューエイジ的なものですよね<sup>②</sup>と述べるように、桂が総括する八〇年代の反原発運動は、彼が述べるところの「気持ち悪さ」——それがどのような「気持ち悪さ」なのかも説明されず——に閉塞させられている。加えて、以下のような「女性」による運動の意義の矮小化も指摘しておく必要がある。

「福島」以降の反原発運動のなかでの女性の声が、逆に、「ニューエーブ」の時ほどには聞こえないように感じられるのは、どうしたことだろう。もちろん、食品の安全性を求める(女性の)声は多々ある。しかし、それは「ニューエーブ」の時ほどに運動へと結びつかず、反発されることを承知で言えば、おむね「グチ」のレベルにとどまっているという印象は否めないのである。／それへの解答は幾つかありうる。まず、「ニューウ

エーブ」が起きた時代の日本は、「バブル景気」の真つ最中だったことがある。(中略)もちろん、そのような経済的余裕こそ、女性たちを全国各地の運動におもむかせることを可能にする。決して否定的のみ言うわけではないが、暇と金がなければ「市民」運動などやつていられないのだ。<sup>③</sup>

福島第一原発「事故」以後の運動が、『グチ』のレベルにとどまっている」というのは、桂が述べるように、彼の予断による印象論であり、留保はあるものの、経済的に余裕のある市民によって八〇年代後半に起こった「反原発ニューエーブ」が担われたと総括するのも、運動に参加した人々の動機や、運動の意義を見失わせる乱雑なまとめである。さらに経済的余裕が、「女性たち」を運動におもむかせたとする見方——なぜ「男性たち」はそこから除外されているのか——も、女性によって担われた運動を下にみる偏見を内包している。つまり、桂は八〇年代における反原発運動を、ニューエイジという「気持ち悪さ」を内包し、経済的余裕のある「女性たち」による「余暇」のようなものとする見方を有し、そこには予断と偏見が介在している。

本企画は、桂の予断と偏見から、八〇年代の反原発運動の評価をわずかながらでも動かしたいという動機にも支えられていた。そこで本企画では、八〇年代に刊行された雑誌に着眼した。運動を論じるために、雑誌をはじめとするメディアに着眼した研究書としては、大野光明ほか編『メディアがひらく運動史』<sup>④</sup>がある。ここでは雑誌を含むメディアを「モノ」でも人でもあり、運動の帰結でありつつ動因でもある」としたうえで、「その物質性が人びとの関

係性を生み出す」もの<sup>5)</sup>として捉えている。雑誌は、運動の成果を報告する場でもあり、運動を活気づかせる動因でもあり、そこから新たな関係性が生み出されるという指摘は重要である。つまり、雑誌と運動は連環する関係にあり、雑誌を分析することで、同時代の運動から何が生まれていたのか、また運動をどの方向に向かわせようとしていたのかを明らかにすることが可能であるということである。加えて、青年雑誌を論じる意義を説明した佐藤卓己の以下の指摘も重要である。

雑誌は月刊であれ週刊であれ記載の発行日の「少し前」に読まれている。つまり、「いま」よりも「近未来」に発行日をもつ不思議なメディアなのだ。(中略)新聞やテレビ、さらにウェブも「いま・ここ」を焦点化する日常的メディアとすれば、「近未来」を意識する雑誌は非日常的で遅延報酬的なメディアと言えるだろう。遅延報酬的とは、しばらく待てば報酬が増える場合に待てる態度を意味する。いまずぐに欲望の充足はないがしばらく先の成果を期待して続ける遅延報酬的な営為の典型を「教育」ということができるかもしれない。だとすれば、「近未来を予感する雑誌」は何らかの意味で「教育的」メディアと言えるだろう。<sup>6)</sup>

佐藤の指摘に、運動の方向に影響を与えようとするメディアであるという雑誌の動因の側面を重ね合わせて考えれば、反原発に関する記事を掲載する雑誌のなかには、「近未来」の運動の「理想」を思い描き、そこに向かうために、読者を「教導」しようとする部

分も有していたと考えることができるだろう。

このような先行する研究を念頭におき、本企画は、八〇年代の雑誌がどのような思想を有し、同時代の反原発運動と関係しようとしたのかを考察することを通じ、福島第一原発「事故」以後である現在を考えるうえで、有益な視座を得ようとする試みとして立案された。

## 二、発表内容報告

佐藤は、「教育」の側面を青年雑誌に即して語っているが、その側面が強い雑誌のひとつに「児童文学誌」があることも確かであろう。高畑早希氏の報告は、理想の「児童」像へと読者を教導する側面を持つ「児童文学誌」と反原発の思想の関係を捉えるものであった。高畑氏は、八〇年代において原発が登場する児童文学を概観したのち、ニューエイジ色のあるたつみや章『夜の神話』(一九九三年七月)に「原発」が描かれていることに言及したが、研究会の参加者のなかから、八〇年代から九〇年代初期の児童文学の読まれ方の大枠を説明したのちに『夜の神話』は、「原発」を描いた作品としては読まれてこなかったという指摘があった。先の佐藤の指摘も併せて考えるならば、当時の児童文学誌が教導しようとする児童像のなかに「反原発」思想を持つ児童というものは、含まれていなかったということであろう。同時代において読み落とされてきた反原発思想の内実や、それがなぜ読み落とされてきたのかを考察することで、「児童文学」という「制度」を解明することにもつながると考えるが、福島第一原発「事故」以後もその傾向が変化す

ることがなかったのかどうかも問題になるはずである。高畑氏の報告は、今後考察する必要がある課題をひらくものであるといえるだろう。

久野桜希子氏は、雑誌『宝島』やそれが形成した「宝島文化」において反原発の思想がどのように展開していたかを報告するものであった。参加者から『宝島』は商業主義に基づき、流行している反原発の問題を取り上げただけで、真摯に反原発に向き合っていたわけではないという意見があった。確かに、流行としての反原発運動は、長期的な運動の構想を持つわけでもなく、「宝島文化」が反原発を可能にする思想を形成しえたわけでもないだろう。しかし近年の社会運動研究が、社会運動の有する意義や意味を考察する研究と、なぜ成功／失敗、発展／衰退したかを問う社会運動をめぐる因果関係に関する研究に大別されるという濱西栄司の指摘<sup>9)</sup>を踏まえれば、『宝島』を研究する意義がないとはいえない。『宝島』が同時代の反原発運動に対して何らかの意義を持つていたとは確かにいえないかもしれないが、商業主義の文脈において、なぜ『宝島』が反原発思想を取り入れ、なぜそれが勢いをなくしていったのかを考えることは、なぜ反原発運動が一過性の流行としては盛り上がるもののそれが持続しないのか―福島第一原発「事故」直後の反原発運動においても、それは反復された―を明らかにすることにもつながるだろう。「宝島文化」が同時代の運動を支えられなかった「失敗」した<sup>10)</sup>文化運動であるという捉え方から、その「失敗」を現在以降の運動が繰り返さないよう示唆を与えることも可能であるかもしれない。また「宝島文化」を享受していた当事者にとつての「反原発」がどのようなものであったのかを考察することは、同時代の

文化流行を分析するうえで必要な作業でもあるだろう。同時代ならびに後の時代にも有効な思想を形成しえたか否かで、反原発運動／思想を評価するのは、ひとつの尺度ではあるが、それが唯一の評価軸であるわけではない。『宝島』や「宝島文化」を研究するにあたって、『宝島』の紙面分析のみでは不十分であるが、同時代に広がっていた「宝島文化」における反原発思想の射程がどこまでであったのかを示すとともに、商業主義と反原発思想の結びつきを、その限界を指摘するとともに、明らかにすることに意義があるはずである。今後踏み込んだ研究を必要とする領域のひとつであるといえるだろう。

加島正浩の報告は、『宝島』と同一性があるといわれる野草社の刊行雑誌『80年代』を取り上げ、ニューエイジの影響ばかりが強調されるために埋没させられていた中尾ハジメとアイリーン・スミスの仕事に着眼し、その意義を明らかにするものであった。『80年代』も『宝島』同様、都市住民の幻想を駆り立てる「商品」として流通した側面があるものの、それとは距離のある仕事として中尾とスミスの仕事を見出し、『80年代』の記事の多様性と、現在の視点から評価できる部分を見出そうと試みた。ただし、ニューエイジ思想やエコロジとは距離のある仕事に着眼したため、次節で詳しく述べるが、一九八〇年代のニューエイジと反原発思想の関係について踏み込んだ分析を行うことができなかった。

### 三、今後の課題

前節の最後に述べたが、一九八〇年代におけるニューエイジ思想

と反原発思想の關係に踏み込んだ分析を行えず、紐が提示する以上の内容を示すことができなかつたことは、今後の大きな課題である。

一九八〇年代の日本におけるニューエイジ思想の展開に着眼した仕事としては、リゼット・ゲーバルト『現代日本のスピリチュアリテイ』<sup>96</sup>が代表的なもののだが、ここでは靈的な想像力や神秘主義などを含む広い概念として「スピリチュアリテイ」という用語を用い、八〇年代の「スピリチュアルな文化」のおおまかな見取り図を示すとともに、その文化が日本のナシヨナリズムの高揚に寄与したことへの指摘が中心になされている。たとえば梅原猛の「日本的靈性」に關連する言説は、戦前にさかのぼる国粹的な傾向を有することが指摘され、八〇年代末に当時の首相であつた中曾根康弘と組んで、国際日本文化研究センター（日文研）を発足させたことなどを取り上げてゐるが<sup>97</sup>、改めて述べるまでもなく、中曾根は日本に原子力発電を導入しようとする躍起になつた中心人物のひとりであり、梅原と中曾根が国粹的な傾向を有してゐたことは確かであるが、それは中曾根の一面を指摘しているに過ぎない。中曾根が推進してきて原子力発電に反対する思想が、八〇年代にニューエイジ思想の影響を受け形成されてゐたことへの分析をゲーバルトは、ほとんど行つていない。当然、ゲーバルトが示した「スピリチュアルな文化」の見取り図を、反原発思想の形成を分析することで、更新する必要がある。

そのための手掛かりが、一柳廣孝の研究によつて示されている。一柳は、「ニューエイジの多様な展開が『精神世界』というカテゴリーの下で集約され、さらに広範なスピリチュアリテイ運動となつ

て現在に至つてゐる」ことを指摘したうえで、一九七〇年代のオカルト・ブームが焦点化した問題のひとつに、既存の科学イメージの問い直しがあつたことに触れる。ただし一柳は、オカルト・ブームは暗黙の科学知を前提としており、科学に対する強固な信頼によつて支えられ、それは一九八五年以降に流行するニューサイエンスにおいても同様であると指摘する。そして、オカルティズムと混合したニューサイエンスが、七〇年代に流行したオカルトを再編し、「精神世界」に接続させる理論的フレームを構築したと述べている<sup>98</sup>。

ニューサイエンスを、一柳は、西洋近代的な自然觀から脱却し、自然現象がもつ高度の（精神性）を強調する思想潮流ではあるが、この種の議論は近代科学の主流への反対論として途絶えたことがないため、新しいのは「ニューサイエンス」というキーワードだけという吉岡斉の説明（吉岡斉「ニューサイエンス批判 科学知の政治学へ向けて」『思想の科学』一九八五年五月）や、田中三彦の「東洋思想と現代物理学の相似性の強調、還元主義にたいする包括的理論の提唱、そしてその両極をつなぐすべてのスペクトルの根底にある神秘主義的アプローチ」の三つの要素を「ニューサイエンス書」はもつてゐるなどとする説明（田中三彦「解説 神秘主義への支持と反論のなかで市民・女性運動の理論的支柱に『朝日ジャーナル』一九八五年九月一三日」）を引用して説明しているが、本稿の関心において重要なものは、ニューサイエンスに批判的な吉岡斉も、好意的な田中三彦も、ともに「脱原発」を志向していることである。吉岡には『原子力の社会史—その日本的展開』（朝日新聞社、一九九九年四月↓新版、二〇〇一年一〇月）や『脱原子力国家への道』（岩波書店、二〇〇二年六月）などの日本で脱原発に至るための道筋を示そうとした著作があり、

田中は『原発はなぜ危険か』において、「ニューサイエンス」に触れたことが契機となり、合理主義的考えを改め、原発の危険性を認識し始めたたと述べている<sup>(12)</sup>。つまり、オカルティズムと混合し「精神世界」のフレームを形作った「ニューサイエンス」に好意的／批判的であるから、反原発派／原発推進派という単純な区分けは成立せず、八〇年代の原発に対する姿勢を下支える思想がどのようなものであったのかは、個別に考察したうえで、新たな見取り図を描く必要があるということである。たとえば、後年はエコロジに傾倒していくようにみえる技術評論家の星野芳郎や、有機農業に可能性をみる榎田劭、宮沢賢治を勧められて読んだことが、反原発の市民科学者になる契機であったことをもって、結秀美に「ニューエイジが入っている」とされている<sup>(13)</sup>。高木仁三郎など、それぞれ反原発を志向するが、それを下支える思想はそれぞれに異なっている。それを丁寧に腑分けしていくことが、八〇年代の反原発思想の展開を明らかにしていくうえで、重要な作業となるはずである。

また参加者からは、八〇年代の反原発思想に反発していた保守陣営の言説を踏まえる必要があるのではという指摘もあった。一九八一年の中野孝次らが中心となって出された文学者の反核声明以来の、反核／反原発言説に対し、保守陣営がどのような反論を提示していたのか、またそれは噛み合っていたのか、すれ違っていたのかなど、保守陣営のバックラッシュも含めた全体像を解明する必要はある。

加えて日本国内のみならず、海外の八〇年代の反原発運動を参照する必要があることも指摘された。たとえば、台湾における七〇年代後半から八〇年代にかけての反原発運動の重要性を指摘し

たうえで、雑誌『人間』を中心に、八〇年代の台湾における核や原発の問題のイメージや内実を明らかにした李文茹は、雑誌『台湾と世界』に「テクノロジーやエコロジ、科学技術などに関するコラムがあり、科学技術や生態、環境の問題に視座を据えた『核』の関連記事」がよく登場することを指摘している<sup>(14)</sup>。つまり、科学技術やエコロジの観点からの反原発思想の形成は、日本国内だけの動きではなく、世界的な流れと共通する部分があり、どこまでが世界的な潮流と共通し、どこからが日本における独自の展開をみせていたのかは、腑分けして考える必要があるだろう。

また環境社会学者の青木聡子は「同じ敗戦国として戦後の歴史を歩むことになった日本とドイツにおいて、原子力施設をめぐる抗議運動が、一時的、局地的には盛り上がりをもせつつも政策転換へと結実していない日本と、連邦全土を巻き込み政府に政策転換を迫るような「うねり」に発展したドイツとの違いはどこにあった」のかという問題意識を出発点に、連邦各地で建設計画を中止させたり、政治の舞台に代弁者を送り込んだりするなど、西ドイツ社会で反原発運動が活性化した一九七〇年代半ばから八〇年代の運動過程を個別事例に即して検証している<sup>(15)</sup>。戦後の出発点は同じであったはずの日本とドイツにおいて、反原発運動の盛り上がりと政策の違いが何に起因するものなのかを考えるうえで、直接運動を研究の対象とするのみならず、運動を下支える思想の異なりを研究の対象とすることも有益なはずである。

以上、自身の力不足のために積み残した課題を含め、多くの宿題をいただいた。当日の議論を盛り上げてくださったみなさまに、深くお礼申し上げます。

注

- 1 桂秀実『反原発の思想史——冷戦からフクシマへ』筑摩書房、二〇一二年二月
- 2 桂秀実ほか「反核から反原発運動へ——一九八〇年代のオーラルヒストリー」『述』五号、二〇一二年二月、八〇—八一頁
- 3 注1に同じ、二八一—二八二頁
- 4 大野光明ほか編『メディアがひらく運動史』新曜社、二〇一二年七月
- 5 「特集 メディアがひらく運動史」注4に同じ、七頁
- 6 佐藤卓己「序論 ミディアム文化としての『青年』雑誌」佐藤卓己編『青年と雑誌の黄金時代——若者はなぜそれを読んでいたのか』岩波書店、二〇一五年一月、v—vi頁
- 7 濱西栄司「社会運動を研究するには？」濱西栄司ほか『問いからはじめる社会運動論』有斐閣、二〇一〇年六月、八一—一頁
- 8 運動の「失敗」に着眼する運動史研究のあり方は、松井隆志「私の運動史研究宣言」(大野光明ほか編『運動史とは何か』新曜社、二〇一九年二月、九—二八頁)が参考になる。
- 9 リゼット・ゲルバルト著、深澤英隆ほか訳『現代日本のスピリチュアリテイ——文学・思想にみる新霊性文化』岩波書店、二〇一三年一月
- 10 注9に同じ、五一頁、五七頁
- 11 一柳廣孝「カリフォルニアから吹く風——オカルトから『精神世界』へ」『怪異の表象空間——メディア・オカルト・サブカルチャー』国書刊行会、二〇一〇年三月、二〇七—二二二頁
- 12 田中三彦『原発はなぜ危険か——元設計技師の証言——』岩波書店、一九九〇年一月、一九二頁
- 13 注2に同じ、八〇—八一頁
- 14 李文茹「雑誌『人間』と「戦後日本」との接点——八〇年代台湾における「核」言説のジレンマ」『原爆文学研究』一六号、二〇一七年一月
- 15 青木聡子『ドイツにおける原子力施設反対運動の展開——環境志向型社会へのイニシアティブ』ミネルヴァ書房、二〇一三年一〇月